

プログラムスケジュール	1日目	釜山(韓国)発/ソウル(韓国)発 成田空港→千葉駅、体温測定など健康チェック、ホテルチェックイン
	2日目	オリエンテーション 安昌俊教授講演会と研究室見学・学生との交流 (最先端無線通信技術とその応用の無線電力伝送技術に関する研究) プログラム参加者と千葉大学学生との意見交換会
	3日目	実機実験(無線電力伝送技術に関する実験、アンテナ試作) 丸田一輝准教授(東京理科大)と井田悠太准教授(山口大)講演会
	4日目	千葉→宇都宮 宇都宮大学の小島研究室見学 小島駿助教(宇都宮大) 無線通信技術に関する講義と実機による実験デモ
	5日目	日光東照宮の見学 中禅寺湖の見学、日光→千葉
	6日目	千葉→上野、国立科学博物館見学 上野→西千葉、プログラムの講評会と修了式
	7日目	千葉駅→成田空港、千葉(日本)発 ソウル(韓国)着/釜山(韓国)着

4日目と5日目は、栃木県に位置する宇都宮大学の小島先生の研究室を訪れ、講義を聞き、その後、日本を代表する観光地の一つである日光東照宮と中禅寺湖を訪ねた。中禅寺湖の訪問時は、深い霧のため、周りが見えず残念ではあったが、日光東照宮では、きれいな彫刻が刻まれた建物を見学することができ、「凄くよかった」と高く評価してもらえた。ほかに日本の川下り体験を行った。川下り体験は参加学生全員はじめてのことだったが、いい思い出になったようだ。

3日目午前中には、2日目の無線電力伝送に関する簡単な実験を行った。無線信号を用いて電力を送信し、受信側ではその受信信号から発電するエネルギー伝送技術について様々な質問があり、非常に関心を集めることになった。午後は、最新の無線通信技術について、東京理科大学の丸田准教授と山口大学の井田准教授による講義をオンラインで行った。特にMIMOという課題について、2名の先生方から異なる観点から説明を受けたことは、学生の関心を引き出し、理解を高めるために非常に良かったと高く評価された。

無線伝送技術とAIに関する
韓国の学生、最先端科学を体験
2020年2月頃、日本に急速に広がったコロナの影響で、人的な交流はできず、オンラインなどを用いた研究交流を行った。しかし、2022年に入り、ワクチンの普及とコロナ変異により毒性が弱くなったウイルスが広まった影響で、日本人に制約があるものの人的な交流ができるようになった。そんな背景もあり、4年ぶりに韓国の高麗大学と釜



安昌俊
(千葉大学教授)

千葉大学の活動報告

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第327回

II 特別連載 II

慶大学の大学院生と学部生10名を日本に招き、国際交流を行うことを決めた。
2022年8月21日に両大学の学生10名が成田に到着し、本プログラムの活動が本格的に始まった。空港へのお迎えは千葉大学の学部4年生2名により行い、訪問した韓国の学生を千葉のホテルに案内した。
2日目、千葉大学に到着後、無線通信研究室内の紹介とオリエンテーションを行った。オリエンテーションの主な内容は、日本の生活習慣、カルチャー、簡単な日本語、および病気・怪我やトラブルの際の対処方法についての説明である。参加学生は、簡単な日本語の授業に特に興味を示した。彼らは日本には強く興味を持っているが、入試では英語が中心であったために日本語を勉強する機会が無かったためだ。今後の交流には、日本語にふれない学生を中心に、科学技術のみならず、日本語や日本文化の紹介も大切であると感じた。オリエンテーション終了後、午後には座学として、無線電力伝送技術に関する講義を行った。講義後は、無線通信研究室の学生との交流会を行った。国籍が異なっても互いに理解できることを感じる時間となった。
3日目午前中には、2日目の無線電力伝送に関する簡単な実験を行った。無線信号を用いて電力を送信し、受信側ではその受信信号から発電するエネルギー伝送技術について様々な質問があり、非常に関心を集めることになった。午後は、最新の無線通信技術について、東京理科大学の丸田准教授と山口大学の井田准教授による講義をオンラインで行った。特にMIMOという課題について、2名の先生方から異なる観点から説明を受けたことは、学生の関心を引き出し、理解を高めるために非常に良かったと高く評価された。



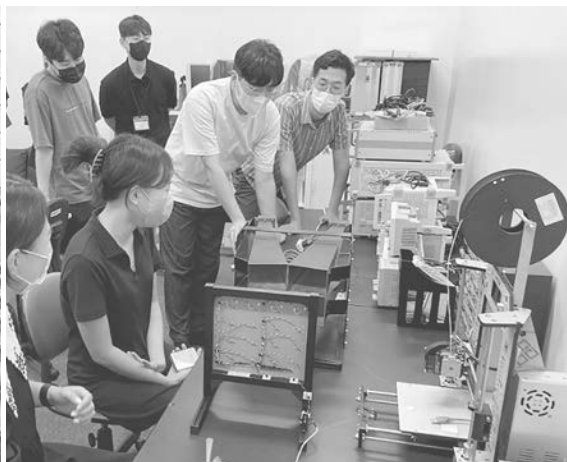
日光東照宮



千葉大学に到着した際の集合写真



国立科学博物館にて



無線電力伝送の実験模様

6日目は、上野にある国立科学博物館に訪
問し、日本の優れた科学技術を体験する機会
となった。見学後、ホテルに戻り、参加した
学生と簡単な面談を行った。多くの学生から
来日する前は日本への渡航に対し多少の不安
感を抱いていたようだったが、実際にプログ
ラムに参加したことにより、「非常に良かった
」との意見を頂いた。また、機会があれば
日本を再訪問したいとの意見があり、本プロ
グラムの当初の目的を達成することができた。

今回の交流をきっかけに、当研究室の博士
後期学生が当大学院先進科学プログラム海外
渡航支援事業の一環として、送出し機関であ
る釜慶大学・鄭研究室に短期滞在し、学生達
とのさらなる交流を図ることが出来た。招へ
い学生の中には、学会で再び来日した旨の連

絡をくれた者もあり、今でも交流が継続して
いる。

すべての参加学生は、今回の招へいプログ
ラムに参加できたことに感謝し、日本という
国についても、情報通信工学という学問につ
いても、さらなる興味がわき、学習の必要性
を深く悟る体験となったようである。「また
機会があればぜひ参加したい」という意見も
多くあった。韓国の学生たちに一層日本の科
学技術や文化を深く理解してもらい、日本を
身近に感じることで将来の両国の架け橋とな
ってくれる人材を育てるために、また機会が
あればこの事業に応募したい。

最後に、この交流プログラムの実現の機会
と多大なるご支援をいただいた科学技術振興
機構のさくらサイエンスプログラムに心より
感謝申し上げます。